

宿を營んだが、古記録を失ひ、明暦二年十二月歿の喜左衛門政正を初祖とする。養嗣子喜左衛門道喜は延寶九年八月歿し、その嫡子伊右衛門勝則は別に片町に住んで藥種を業としたが、勝則は嫡子なるを以て宗家とし、分家は二代の後に酒造を業とした。歴代中有名の人々は龜田氏として別項に載せる。

ミヤダニ 宮谷 能美郡東高山の北方にある谿谷で、その水牛首川に注ぐ。

ミヤナガ 宮永 石川郡中村郷に屬する部落。

ミヤナガイチ 宮永市 石川郡中村郷に屬する部落。

ミヤナガウチ 宮永氏 尊卑分脈に林新介成家の子宮永七郎國員、その子宮永三郎家利、その子同彌三郎利助、その子同新三郎家國とある。宮永氏は石川郡宮永に關係のあるものであらう。

ミヤナガシン 宮永新 石川郡中村郷に屬する部落。

ミヤナガヨシツク 宮永嘉吉 大聖寺藩士。通稱理兵衛、諱は嘉吉、桂亭又は無學と號した。江沼郡雜記を著し、江沼志稿の編纂に加り、本草・茶道・劍禪並びに之を學び、安政六年三月八十一歳で歿した。

ミヤノ 宮野 河北郡五ヶ庄に屬する部落。

ミヤノウラ 宮ノ浦 石川郡大野湊神社主河崎秀憲の信田屏風記に、同郡宮腰のことを『中古の反古にはその浦を宮浦と云ひ、其湊を宮腰と呼けることも、みなこれ當社より起るよし書置けり。』とある。宮浦の名はこの外に見當らぬ。

ミヤノコシ 宮ノ腰 石川郡大野庄に屬する部落。郷村名義抄に、佐那武明神が海岸佐良嶽に在つた時、その宮の脇に起つた邑であるとす。源平盛衰記に『平家は礪波山を攻落されて、加賀國宮の腰佐良嶽の濱に陣をとる。』太平記に、『高上野介師治を大將として、加賀・能登・越中の勢を率して、加賀國を経て宮腰より向はる。』陸涼軒日録寛正三年七月十九日に、『臨川寺領賀州宮腰内平木、尤對寺家爲不義者可追放之由、自寺家以連判之狀被敷申云々。』など、見える。藩政時代に入つては、初め村制であつたが、安政三年十一月宮腰町と改めた。↓カナイハ 金石。

ミヤノコシオツメマイブギヨウ 宮ノ腰御詰米奉行 寛文年中不破五左衛門の命ぜられたのがその始であらう。次いで八年に横田吉兵衛、其の後高山吉兵衛が見え、元祿の頃は二人宛勤めたが、享保の中頃小塚甚五左衛門が命ぜられてから全く一人役となつた。

ミヤノコシオフナゴヤ 宮ノ腰御船小屋 石川郡宮腰にあつた藩有船泊の緊留所で、前田利家の代天野岡右衛門が知行百七十石で舟手裁許を命ぜられた時に起る。船手足輕もこの頃からあつたのであらうが、詳かでない。

綱紀の時延寶六年、江戸で歌頭三人を抱へ、米二十五俵金五枚宛を賜はり、平水手七十人に二人扶持外銀百六十目宛、隔年に給一・單一を賜はつたといふ。後世は水手五十人の内小頭二人廿俵宛、横目二人料銀九十目を賜はつて、船歌を指南することになつてゐた。

ミヤノコシカイドウ 宮腰街道 ↓カナイハオウカン 金石往還。

ミヤノコシコウ 宮腰港 ↓カナイハコウ

金石港。

ミヤノコシザケ 宮ノ腰酒 一條兼良の尺素往來に、『兵庫西宮之旨酒、及越州豊原加州宮腰等、相副瓶子并銚子提子、所調役之也。』とあつて、石川郡宮腰の釀酒が名産であつたと見える。

ミヤノコシツ 宮ノ腰津 祇陀寺の大智禪師行録に、その元から歸舶した時のことを叙して、『著加州石川郡宮腰津也。是國朝正中元年也。』とある。宮腰津は宮腰港である。

ミヤノコシマチブギヨウ 宮ノ腰町奉行 石川郡宮腰町奉行は、山崎宗俊が文祿中より慶長四年まで之を勤め、八年に横田久二、十二年に岩田勘右衛門命ぜられて、二人宛勤め來つたが、延寶五年茨木傳右衛門の時から一人役となつた。

ミヤノタニ 宮ノ谷 ミヤノ 河北郡倉見内の小字。

ミヤノホ 宮ノ保 河北郡敷月庄に屬する部落。

ミヤノマヘ 宮ノ前 ミヤノ 鹿島郡熊木院に屬する部落。久麻加夫郡阿良加志比古神社あるが故に名づける。

ミヤノヤチ 宮ノ谷 鳳至郡山田郷に屬する部落で、亦宮ノ谷内とも書いた。明治八年十月魚地と合併して宮地と稱する。

ミヤベヤソエモン 宮部彌三右衛門 寛永四年士籍に、二百石臺所横目とあり、同六年前田利常に従うて小松に移り葭島に住んだ。又二十年彌三右衛門の妻を十四歳になつた侍女が殺害したので、之を今江の松原で竹鋸で挽き殺し、其の骸を磔とさせたことが本藩録に見える。

ミヤホ 宮保 石川郡笠間郷に屬する部落。室町家内書案によると、永享二年に白山の若衆徒等、南禅寺領石川郡宮保に亂入した。因つて閏十一月十九日將軍足利義教は奉書を下し、暴徒の退治を守護富樫介・白山長吏及び金劍宮の衆徒に命じたことがある。又陸涼軒日録長祿二年十一月十日の條にも、『南禅寺領加賀國宮保赤松次郎法師宿陣、被退于他所可然由以狀白之。』とある。

ミヤホハチマンジンジャ 宮保八幡神社 石川郡宮保に鎮座する。式内等舊社記に、『宮保八幡神社。笠間郷宮保村鎮座。舊社也。』と見え、又加越能舊跡緒には、『宮保領の内社有之。八幡宮にて、是へも義仲鏡を被上置候由に候へ共、今程鏡無之候。同領の内八幡と申所有之候。右八幡の御供田之由申傳候。』とある。

ミヤホミノウリ 宮保美濃瓜 石川郡宮保に産する。寶曆の調書にこの村に美濃瓜を出すとある。

ミヤマタイシユウ 深山台州 安良の四子。通稱清八、諱は忘言、字は得意。台州・雪樵・費素又は育王山人と號し、好んで水墨の山水を畫いた。もと加賀藩の計吏であつたが、放蕩にして飲博に耽り、遂に能登に謫せられ、赦に遇うて歸つた後剃髮して寒鴉坊といふた。寢覺の螢に、深山彦太夫は劍術秀達の人浪士であつたが、無頼の徒で、津田太一・長願寺と共に京に走つたとある。この彦太夫も台州のことであらう。津田太一は隨分齋である。

ミヤマヤスヨシ 深山安良 通稱嘉右衛門。字は孟明。童峰又は陸渾と號した。越中今石動の人で、その地に於いて藩士篠島氏の與力